

物わがりの悪い親が タフな交渉人をつくる

三森ゆりか

商社勤務時代、東独のプロジェクトチームに参加していたことを前回私は書いた。今回もここでの経験から、家庭での議論や交渉の「練習」の重要性を私は述べてみたい。

東独から関係者が来日し、契約やプロジェクトの進捗状況をめぐる会議が終わった後、彼らの歓迎パーティが組まれることがしばしばあった。パーティはあらかじめ予定されたものであったため、直前の会議が紛糾し、交渉が決裂したままでパーティにのぞまなければならない場合もあった。ドイツ人たちはビジネスはビジネス、社交は社交と見事に切り替え、パーティを楽しんでいた。一方我が方は、会議での議論の感情をパーティの席上にまで引きずっていたようで、対応のそ

こちなさが目に付いた。会議での議論の不完全燃焼が外に放出されないまま内に籠もり、相手を恨む感情が蓄積されたためであろう。議論慣れたドイツ人と議論に不慣れた日本人。文化の差が、重要な局面での社交の場

も大きな影を落としていた。そしてこのことが次のビジネス・チャンスを失う結果をもたらせば、こちら側にとっては大きな損失になったに違いない。

ドイツの文化は「議論の文化」と呼ばれる。ドイツ人は家庭でも学校でも主婦の集まりでも、論ずべき問題があればその場で即座に議論を始める。当然のこととして、その場に一〇人いれば一〇通りの考えが存在する。一つの問題を多面的な視点から分析して批判的に検討し、互いに納得できる建設的な見解を引き出すために彼らは議論をするのである。

たとえば学校の授業においても議論は大きな比率を占める。一つの問題をめぐり、子供たちは批判的思考に基づき相互の論理的な欠点を批判しあい、ときには同調しながら、最も良いと思われる結論を導き出す努力をする。議論が紛糾したときには、感情的な発言をする子供がいる。すると教師は辛抱強く「理性的に！ 論理的に！」と注意する。日常的な地道な議論の訓練の中で、子供たちは議論や交渉の練習を積み重ねる。そして議論の方法や作法そのものばかりでなく、感情を制御する方

法を学び、他人からの批判にも耐える強靱な精神力を身につけるのである。そしてこのように数多くの場数を踏んだ経験が、実社会では大きな財産となって生きてくることを、私は商社での交渉で目の当たりにした。

議論や交渉にも「練習」が不可欠である。この練習の場として、私は家庭が最も手取り早く、効率がよいと考えている。小遣い、門限、交友、旅行等、家庭には子供を巡る問題が山ほど存在する。これらの問題について、親と子では見解が異なるのがたびたびである。子供が自分の主張を通そうとすれば、親を相手に交渉し、自分の考えを認めてもらう努力をしなければならぬ。こうした事態が起こったときこそ絶好の「練習」の機会である。親は強力な交渉相手に変身し、子供にじっくりと付き合うのがよい。家庭での議論を通して、子供は交渉や説得についてのあらゆる基礎技術を学ぶ機会を持てるし、論理的に主張を組み立ててゆくことの重要性を学ぶにちがいない。子供の交渉に付き合う際、親は感情的な対応をしてはならないのはもちろん、「理性的に、論理的に」議論をするよう心がけなくてはならない。

議論は感情ではなく、論理で詰めてゆくものだ

からである。また、一つの問題について様々な視点から多面的に批判的な検討を加え、最良の結論を論理的に引き出すよう、親は子供を誘導してゆく必要がある。自分の考えを親に批判され、論理的な修正を加えられることを通して、子供は批判に耐える強い精神力と感情の抑制方法を身につける。

親としては、物わがりの良い親になるほうが楽ではある。子供とよけいな軋轢を引き起こさずに済むし、家庭の平穏は乱されない。しかし、物わがりの良い親は諦めの早い子供を作る。何でも思い通りになる状況で育った子供は、壁にぶつかったときに対処方法を知らないし、自分の考えを多方面から批判的に検討する技術が身につけていない。論理的に相手を攻略する術を身につけていないため、感情に頼ることとなり、その結果自滅することとなる。こうした環境で育ったなら、紛糾した議論の後のパーティで社交を楽しむことなどとてもできない相談であろう。物わがりの悪い親が、国際社会で必要とされる強靱な精神力を持った交渉の担い手を育むにちがいない。

(つくば言語技術教育研究所)